

日本記者クラブ会報

第 440 号
2006 年
(平成 18 年)
10 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp



クラブタイを贈る滝鼻理事長

視聴率は低調

選 任 会 討 論

が先行するわけではないし、そんなリスクを冒すほど純情でもあるまい。安倍総裁誕生の決め手は、安倍さんが小泉さんの意中の人だったことであり、それをメディアはかなり早く嗅ぎとって報道してきたということなのではないだろうか。

盛り上がりを欠いた主因は、総合司会を務めた川戸委員のコメントにも表れていると思う(2ページ)。それはともかくテレビ各局

の総裁選候補を迎えての番組視聴率はいづれも低調だったと聞く。

クラブの討論会(9・11)の視聴率も今回は関東が2・6で、関西が2・7にとどまった。前回(03・9・11)小泉、亀井、高村、藤井の4候補は3・2と4・5だった。その前(01・4・18)小泉、麻生、亀井、橋本の4候補は4・0と4・1。

もう一つ前(99・9・17)小淵、加藤、山崎の3候補は3・1だった。今回はそのいずれよりも低い2%台だった。ただし小泉さんが徒手空拳で橋本さんに挑んだとき(95・9・20)は1・3だったのでワーストではない。

今回の総裁選で気になったことがある。安倍さんが取りあげた課題や訴えたテーマと、一般の人々が政治に期待していることとのギャップがひとつ。もう一つは投票前夜のヤフ

副理事長に石村氏(NHK)

9月の理事会で、放送側の副理事長にNHKの石村英二郎さん(理事・放送総局副総局長)が互選された。

昨年5月の総会・理事会で滝鼻卓雄さん(読売・東京本社代表取締役社長・編集主幹)が理事長に選任されたが、その直前に副理事長の小林昂さん(現・BS日本社長)がクラブの役員を退いたため、放送側の副理事長はこれまで空席だった。

1の総裁選アンケートの結果だ。麻生さん54%、谷垣さん32%、安倍さん16%。

小泉さんは投票前日、森さんと昼食をしたとき「議員票で」6割超えたら最高でないか」といったそうだが、鋭いヨミだ。クラブで有終の美は飾ってもらえなかったが、5年5カ月、ご苦労さまでしたといいたい。スタンディング・オベーションとまではいかないが、拍手をおくりたい。経済改革は突破口だけだったかもしれないが、政治を近代化した功績は大きい。ただし新首相誕生のシナリオライターのでもあるので、最終評価は安倍政権の先行きを見てからにしても遅くはないだろう。

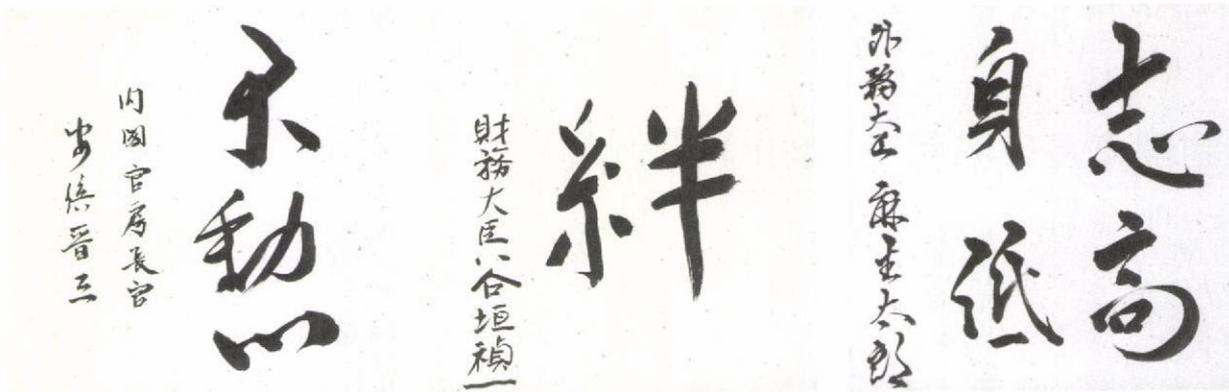
た。新聞側の副理事長・吉田慎一さん(朝日・常務取締役)とともに、石村さんは滝鼻体制の中核を担うことになる。なお、NHKからの副理事長就任はこれが初めて。

この理事会で、橋本達明・総務委員長の後任に朝比奈豊さん(毎日・常務取締役主筆)が、石村英二郎・施設運営委員長の後任に、金平茂紀さん(TBS執行役員・報道局長)がそれぞれ委嘱された。

(専務理事 岩崎 玄道)



写真提供 産経新聞社/ガンマ通信社 7Pに関連メモ



■細川政権誕生の総選挙以来、国政や党首選挙の討論会に関わってきたが、こんなにギリギリなかつた討論会は初めて。家の子郎党の生死を担うという悲壮感もないし、派閥分裂などの場外乱闘もない故か。唯一むき出しに闘志をあらわにしたのが小沢評を聞かれたとき。「安倍候補へ雪崩」の現状では敵はもはや党内ではなく外。「開かれた政党」をアピールするために3人がそろって討論者を演じて見せたという感じがしてならない。

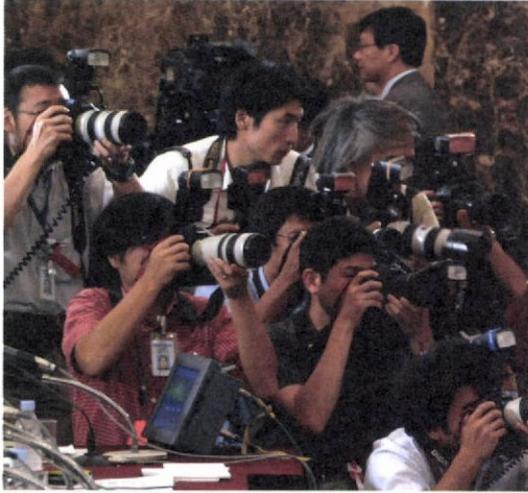
総合司会＝川戸恵子（TBS）

■第1部の討論では、日中国交正常化と歴史認識の関係、政経分離の可否をめぐる安倍・谷垣両氏の白熱の応酬が、7分間という比較的長い持ち時間の中で直接対決の妙味を感じさせた。ただ、ストップウオッチ持参の麻生氏を含め、それ以外の部分では、自説の一方的な主張に傾きがちであった。候補者が相手の反応も織り込みながらあらかじめ戦略を練れるよう、候補者周辺へのより実践的な事前説明が必要かもしれない。

第1部司会＝影山日出夫（NHK）

■質問の楽しみの一つは、意地の悪い質問への反応を見ることにある。案外、器量がわかることがあるからだ。安倍さんはどうだったか。薄い政権構想パンフレットへの批判に対しても、憲法改正をめぐる「アナクロ」問答にしても、賛否は別に、なかなかの「切り返し」だったと言わなければならない。問題は、反応の素早さを超え、大きく包み込むように、政治や政策を語る事ができるかどうかにあるのではないか。そんな印象だった。

代表質問＝橋本五郎（読売新聞）



3人の討論会の発言はクラブのホームページに



開会 あいさつをした滝鼻理事長は、最後に記念品を贈った。「クラブは貧乏団体なのでお礼はネクタイしかありません。3種類から選んでいただきました。安倍さんは『美しい国』を象徴する赤、谷垣さんは人と人の結びつきで縄をなうごとくストライプ、麻生さんは日本の成長を象徴するブルーでした」



手前から、代表質問の小孫（日経）橋本（読売）山田（毎日）宮田（朝日）の各企画委員

■これも討論会というのかなという印象を持ちながら質問者席に座っていた。安倍候補の独走という特異な状況から3候補とも論争意欲が弱く、前半のディベート部分では他候補の弱点を飛ばいあうようなやり取りさえあった。後半の質問部分でそうした「談合」構造を破れず、年金や税制について踏み込んだ発言を引き出せなかった我が身の力不足を恥じ入るばかりだ。次回に向けて時間配分の見直しなど工夫が必要かもしれない。

代表質問 小孫 茂（日本経済新聞）

■3人とも激することもなく、政策的にはまるでお約束のような役割分担だった。ふと「良い子、悪い子、普通の子」という、ひと昔前のお笑いトリオを思い浮かべてしまった。安倍氏がどの子にあたるかはともかく、靖国参拝や歴史認識の質問ではかなり「ムツ」ときていたようだ。「あいまい」戦術で乗り切るつもりのようなのだが、首相になればとても通用しない。対応を間違えようと、「悪い子」になってしまいかねない。

代表質問 宮田謙一（朝日新聞）

■「記者会見というのは想定した質問しかしてこない」（文藝春秋10月号）と安倍さんは言う。なかなかの貫禄だが、「米国の中東政策をどう見るか」という質問には正面から答えなかった。イラク戦争と日本の対米支援の正しさに饒舌を費やし、「今の認識を」という2度の催促を無視した。想定外か。軽妙な受け答えで人気の麻生外相が「他国の政策を総裁候補に聞くか」と気色ばんだのも意外。「脱戦後」志向の両氏にしてめったな米国批評はできない重苦しさを実感した。

代表質問 山田孝男（毎日新聞）

黒川 清 日本学術会議会長

9・1(金) 囲む会 司会 柴田鉄治委員
出席 48人

▼大学の「大相撲化論」を力説



在米研究14年という異色の経歴、学者らしくないざつくばらんな語り口、ほとばしる情熱。「囲む会」で黒川さんは、息つく間もなく信頼される科学者コミュニティの建設や大学の国際化の必要性を説き続けた。

日本学術会議は昨年10月、法改正で新体制がスタート。この変革の時期に3年2カ月、会長を務めた。70歳定年で退任直前のいわばサヨナラ会見を黒川さんは「新しい学術会議になって何をしたか」と切り出した。まず取り上げたのが今年2月の147回総会で示された「日本学術会議の新しいビジョンと課題」。

2050年には世界の人口が90億人に達し、食糧、エネルギーや温暖化の問題が一層深刻化することが目

に見えている今、世界的に科学者集団に対する期待が高まっている。各国の連携活動も盛んになってきた。例えば昨年、環境問題とアフリカ開発をテーマにイギリスで開かれたG8を前に6月、同国のロイヤル・ソサエティーがG8参加国と関連諸国の学術会議を糾合してまとめた声明がその例だ。日本学術会議もその機能を担わなくてはいけないのに日本ではそうした認識が薄い、と黒川さんは嘆く。

後半は得意の「大学の相撲化」論をぶった。世界の有名大学が優秀な学生をどう集めるかを競う中で、日本の大学は鎖国状態。外国人入力が大きい相撲に学んで大学を開け、と言う。旧帝大の学部学生の3分の1を3年以内に外国人学生に開放せよとも黒川さんは叫んだ。

盛んに出てくるフレーズが「僕のウェブサイトをみてよ」。発信することに熱心な黒川さん。メディアはこの変化の速い時代を読んで後世のために何をすべきかを発信せよ、と何度も会場の参加者に発破をかけた。

毎日新聞出身 谷口 泰三

ジェームズ・D・ケリー 在日米海軍司令官

9・6(水) 昼食会 司会 島田洋一理事
春名幹男委員 通訳 長井鞠子 出席 106人

▼自衛隊との「親友関係」強調

北朝鮮が7月5日にテポドン2号などミサイル7発を相次いで日本海域に発射した後、北東アジアにおける危機の抑止は、日米両国にとっていっそう深刻な問題となった。



米国防総省は9月1日、大気圏外を飛行する弾道ミサイルを、地上配備の迎撃ミサイルで撃ち落とす実験に成功したと発表。これに先立つ8月16日、神奈川県は、2008年に米横須賀基地に配備される予定の原子力空母「ジョージ・ワシントン」について、受け入れを表明した。

ケリー司令官の記者会見は、日米同盟が緊密の度をいっそう強めつつある時期に行われた。

ケリー司令官は、日米同盟の確かさをめぐっては「どのような協定でも、最大限の効果を発揮するには関係人間の信頼関係がものを言う」と前置きしたうえで、自衛隊のカウ

ンターパートとの間に親友と言える関係がある事情を強調。在日米海軍の規模について「結構大きな力だと思っている」と自信を示した。

一方、ケリー司令官は、中国海軍の動向については「人民解放軍は、増強する兵力を何に使うつもりなのか、透明度が足りない」と懸念。中国に説明責任の自覚を注文した。

少し緊張させられたのは、インド洋で海上自衛隊が米海軍に行っている給油支援に謝意を表明した場面。ケリー司令官は「アフリカの角をめぐる活動にも大きな貢献となった」と説明したが、給油支援を可能にしているテロ特措法は、9・11テロ事件に対応し、「国連憲章の目的達成のための諸外国の活動」を主に支援の対象としているので、アフリカにおける活動に対する支援の可否はやや微妙かも。現場の密接な関係は十分に理解できたが。

東京新聞論説委員 今里 義和

金容雲 日韓文化交流会議韓国側座長

9・8(金) 四国会 司会
 芋原一善委員 出席 63人



▼日韓共同でアジア文化の時代を

韓国を代表する知日派知識人の一人である。それにしても、日本語の流暢さと日本文化への造詣の深さに出席者は驚いたようだった。

講演は、日韓の著名な人物や文学作品の比較文化論から始まった。

「花神」で司馬遼太郎は明治の指導者の公私の区別を描いたが、韓国の小説「太白山脈」は司馬流でいえば「私」を描く。万葉集に「愛(私)」が出てこない日本と、「おおよけ」に当たる言葉がない韓国。その違いが現代まで続いて摩擦を生んでいるのではないか。そう問題提起した上で話は最近の変化に至る。

例えば、日本女性に「ヨン様ブーム」が起きたのはなぜか。「夫から聞けない」「愛する」という言葉が氾濫する世界に気づい

たからではないか」。一方の韓国は、恐れていた日本の大衆文化を開放したら、韓国製作映画の1割は日本原作になった。「お互いに、いいところを見いだすようになってきた」わけだ。

日本原作で韓国人監督、俳優は中国人といった映画も増えた。99年にできた日韓文化交流会議では、日本側の平山郁夫氏が北朝鮮の高句麗壁画古墳群を世界遺産にと提唱し、実現させた。こうした流れを進めれば「東アジアが一つの大文明圏になる」というのが結語だった。

ただし、日本を持ち上げてばかりではない。北朝鮮情勢は「昔の日本がABC包囲網で追いつめられたのと同じに見える」として、「歴史は繰り返すのか」と問いかけた。

金容雲氏は東京で生まれ、早大1年で終戦を迎えた。空襲の記憶も生々しい。関東大震災の時に父が朝鮮人を殺したという友人の自慢話に胸が痛んだ少年期の記憶もある。だからこそ、日韓は手を携えてアジア文化の時代を築くべきだ。そんな思いを真摯に受け止めた。朝日新聞論説委員 隈元 信一

福島 瑞穂 社民党党首

9・13(木) 記者会見 司会 影山日出夫委員
 出席 72人



▼二大政党的谷間で続く苦闘

「55年体制」の真つ只中で旧社会党を担当した者にとって、党存廃の崖っぷちに立たされている社民党党首の「ポスト小泉」政局観を聴くのは、ちよつと複雑な心境であった。まして、それぞれ圧倒的支持で政治の新たなステージに登場した安倍、小沢両代表による自民・民主二大政党間の政権をめぐる主導権争いにマスコミの関心が集中する中、実は失礼ながら事前に昔の同僚と「記者が集まるだろうか」と密かに心配し合

った。だが、会場は少数の現役記者と多数の白髪交じりの「心優しき先輩記者(司会者)でほぼ埋まった。会場の雰囲気気に気を好くしたか、「瑞穂節」はこのほか勢いがよかった。「自民党の対立軸になる唯一の政党・社民党」というスローガ

には「もはや反主流がいなくなった自民党の中に対立軸は存在しない」という認識と、「野党間でブリッジ役を果たせるのはわが党」という自負心の二重の意味を持たせたかったに違いない。「小泉さんは郵政改革と自分のことにしか関心がなかったが、安倍政権はそれより百倍も怖い」と言う通り、安倍政権の憲法改正、教育基本法に代表される。戦後民主主義 否定への危機意識、警戒感強い。「反戦・反ファシズム統一戦線」の闘いを、という女性党首の総括には久しぶりの高揚感さえ漂う。安倍政権の登場を「平和と暮らし」を守る反転攻勢の転機に、という悲願の表明でもあるだろう。

だが質疑での「外国のメディアは安倍氏を、デンジャラス・ナシヨナリスト」と言っている。党首の認識はまだ甘い」という指摘と、「憲法改正や靖国参拜に表れた最近の世論、特に若い世代の意識は戦後民主主義からは遠く離れている」という指摘を、どう結び付けていくのか。巨大与党と小沢民主党的の谷間で叫ぶ福島社民党の苦闘は続きそう。毎日新聞出身 尾崎美千生

志位 和夫 共産党委員長

9・15(金) 記者会見 司会 高橋利行委員
出席 67人

▼「理詰め殺法」は健在だが、固い

1990年の日本共産党大会で志位和夫中央委員が突然、書記局長に抜擢された時、世間は驚いた。36歳、党外の人間には無名に近い。「志位フー(志位って誰)」と言うのが当時の論調だった。だが、国会などで政府与党を理詰めで攻め立てた舌鋒の鋭さは鮮烈な印象を残した。しかし、若さゆえの固さもあつたと記憶する。その彼も今や、ミヤケン去り、不破哲三氏も一線から退き、文字通り「ミスター共産党」に上り詰めた。奇しくも、後継首班の安倍晋三氏とは同年の52歳。



記者会見の主テーマは「小泉政権5年間の総括」だが、「三つの異常」として①過去の侵略戦争の正当化②アメリカの言いなり③格差社会を生

んだ極端な大企業中心主義と、一刀両断に切り捨てた。そして後継総裁総理の安倍氏に対しても①人間らしい労働の破壊②年金改悪③税制による大企業優遇、庶民への増税④教育改悪とバツサリ。論旨明快、「理詰め殺法」は健在なり、だ。

ならば「小沢民主党代表が説く自公政権打倒のため参院選での選挙協力はどうか」との記者質問には「民主党も自民党と同じ」と二べもない。

冷戦後、欧州などの各国共産党は連立与党に積極的に参加するなど柔軟な姿勢に転じた。昔からの日本共産党の持つ無謬性、あるいは唯我独尊の表れか。会場から「志位さんは相変わらず固い」という声が出たゆえんでもある。

しかし、最近の訪韓では同国の与野党政党との交流を深め、引き続きパキスタン政府の公式招待で同国を訪問するなど独自の政党外交を展開している。こうした政党外交を通じて同党に欠けている国際性や柔軟性を身につけることができれば、次なる飛躍が期待できるかもしれない。

時事通信出身

増山榮太郎

後藤田 正純 前内閣府政務官

9・22(金) 記者会見 司会 田崎史郎
委員 出席 90人



▼家計の安全あつての成長戦略

「金融庁案は有識者懇談会の結論と大きく外れた内容で、承服できない」と、貸金業規制法の金融庁改正案に抗議して、小泉前内閣の内閣府政務官を辞任した自民党の後藤田衆院議員が、思いのたけを語った。

後藤田氏は改正案の中間報告づくりで、有識者懇談会の大半がグレイゾーンの廃止を主張しているのに、業界代表が占めるオブザーバーの意見を両論併記としたことに噛み付いた。「オブザーバーの意見は委員の意見とは別に書くべきだ」と。

その怒りが辞任につながり、自民党の合同会議で金融庁案の修正を迫った。結果は特例金利を金融庁案の28%から25・5%に引き下げ、適用期間も5年から2年へと大幅に短縮することなどの自民党案ができた。

ただ後藤田氏はその案にも「見直し条件付で同意した」と強調した。条件とは特例金利の見直し、利息制限法の金利区分の金額引き上げ撤回など5項目。臨時国会で改正案を審議し、「見直しが実現しない場合には野党で思いを同じくする人がいれば超党派で(修正を)やりたい」と、執念を燃やす。

消費者金融は「サラ金地獄」といわれた時代があつた。貸し手が借り手の弱みに付け込み、高利で過剰に貸し付け、荒々しい返済の督促を迫る。借り手は返済のためにヤミ金融に走り、さらに高い金利を要求され、借金が雪だるま式に増え、借金地獄に陥って遂に自己破産となる。

後藤田氏が「家計の安全があつて、はじめて日本の成長戦略があつた」ことを強調するのは、小泉政権の規制緩和、市場原理の行き過ぎを批判しているように見える。確かに何でも規制緩和ではなく、分野によっては規制強化も必要だろう。とはいえず「貸さない親切」と「借りない勇気」が大事である。

日刊工業新聞論説委員長

柏木 慶永

自民党総裁候補討論会メモ

【日時】9月11日（月）午後1時5分～3時10分「どんな国、どんな社会を目指すのか」

【第一部（55分）】各候補がそれぞれの討論。各候補が持ち時間7分を使い、相手を指名して討論。第1テーマは「将来不安をどうするか」、第

2テーマは「外交・安全保障政策をどうするか」。そのあと最後、各自1分間ずつ締めくくりの発言。

【第二部（70分）】会場の出席者から集めた質問をもとに企画委員会の代表が各候補に質問して、1部の議論を発展させ、内容を深めた。

【司会者など】総合司会 川戸恵子
第1部司会 影山日出夫 第2部の代表質問者 橋本五郎、山田孝男、

宮田謙一、小孫茂の各委員。

【出席者】参加 315人（ベン、カメラ取材、党関係者含む）。スチルは東京写真記者協会8社、外通3社、外人記者クラブ代表1社。

【生中継など】テレビはNHKが地上波、ラジオ、BSで生中継（視聴率は地上波で関東2・6%、関西2・7%）。民放は日本テレビが代表で中継取材し、CSのニュース専門チ

ヤンネル「日テレN24」（3時まで）と「TBSニュースバード」が生中継。フジテレビは地上波のニュース（2時5分）で中継を入れた。EN

Gはニュース映画協会代表でフジテレビ、外人記者クラブ代表でBBCのほか、AP、朝日ニュースター、日経映像、共同通信、ブルームバーグ、CNNの6社。

リレーエッセー

OPECとの出会い②

数ある国際会議の中で、OPEC（石油輸出国機構）取材ほど珍妙な経験はなかった。何がどうなっているか、最後までよく

分からない。肩に力が入っていた若い身には、相当のストレスだった。ただし、ロンドンに新聞記者として駐在していたころ（1977～1981年）の古い話です。

79年のイラン革命と前後して第



二次石油危機が起ころり、OPECの動向に再び注目が

急騰15ドル超

第二次石油危機の喧騒

集まった。閣僚会議の開かれるアブダビ、ジュネーブ、アルジェ、ウィーンへと出張を重ねた。1バレル15ドルを超えると急騰が止まらなくなった。大消費国日本での報道ぶりが会議の行方にも跳ね返るかなど

い。全体の流れではなく、「私はこう思う」式のおしゃべり。談話をたくさん集めれば方向がつかめるかとんでもない。バラバラなのだ。会議の終盤にOPECの盟主サウジアラビアがドンと発言して決まり。そ

久保伸太郎

ここにたどり着くまで時間をかける。その繰り返しだったのだと分かったら、今でも疲れが出る。

と考える余裕もなく、非公開の会場から関係者らしき人物が出てくるたびに、各国の記者と一緒にウワツと取り囲み、「値上げ幅は？ 減産幅は？」と、質問を浴びせる。その答えがまるで当てにならない

が絶えないというのに、日本テレビのロンドン支局長がある時、会議場となったジュネーブのホテルにさうと持ち込んだ最新兵器は、実にはうらやましかつた。ロビーの一角でアタッシェ・ケースを開く。壁の電

源コンセントにコードをつなぐ。アンテナを立てる。ダイヤルを回す。カバン全部が電話装置という代物だった。ポケットに入る携帯電話で東京とやり取りできるなんて、夢にも思わなかった。

その後の日本は、円高、省エネ、原油備蓄、LNG（液化天然ガス）への切り替えなどが進み、1バレル70ドルをうかがう価格高騰にも耐えている。OPEC取材の喧騒を思い出すと、それなりの感慨があります。

（日本テレビ放送網社長 元読売新聞記者）

OPECのシリーズはこのあと日経、朝日へとバトンが繋がります。他社OBの方の投稿をお待ちします。

マイクで拾った話 拾えなかった話



西山 弘道

30数年間、マイク片手にラジオ報道一筋で過ごした私にとって、心残り一つもスクープを取れなかったことだ。従って、この欄に載った諸先輩の輝かしい特ダネ話は私には無縁である。だが、汗だけは同じように流したつもりなので、私の取材メモを綴ってみた。

ラジオは肉薄が命

新聞記者にとって筆・ペンが命であるよう、ラジオ記者にとってはマイクが命である。録音するには、マイクを対象に接近、肉薄しなければならぬ。現場にカメラより前に出て、マイクを突きつけるからよくカメラマンと喧嘩をしたものだ。「とにかく肉薄しろ」と先輩から言われ続けてきたものだから、珍事も起きる。これは開局した昭和28年頃、わ

が社に残る伝説的な話である。

国会内で当時の吉田茂首相と鳩山一郎氏の重要会談が行われた。会談が始まり、取材の報道陣が下がったころ、何を思ったか、わが社のT記者は会談のテーブルの下に録音機を持ってサツともぐった。厚地のテーブルクロスがかけてられてあったから、吉田・鳩山両氏にはわからない。T記者は結局、会談の内容をすべて録音してしまった。

「何もスクープをとるといつつもりでなく、録音機材の点検をしているうち、つい出そびれてしまった」というのがT記者の弁だが、さすがに当時のデスクはこの録音テープを放送しなかった。

おしゃべり六さん

さてこれからは私の取材記だが、

永田町の政治家たちは異能人間、自己顕示欲人間の集まりだけに人間学的に大いに興味をわく。しかし、本音と建前の世界でもあるだけに、マイクを向けても建前しかしゃべらない政治家が多い中で、まれに本音もあけすけにしゃべる政治家がいた。中川一郎、渡辺美智雄氏らだったが、中でも元自民党幹事長の田中六助氏は「おしゃべり六」と異名をとっただけにマイクなど全く意識せず、本音をズケズケしゃべった。

昭和53年の福田内閣末期、時の大平幹事長が総裁選出馬を表明、大福決戦。かと騒がれていた時、私はまだヒラ代議士だった田中氏を議員会館に訪ねていった。私がマイクを向けると、六さんは声を潜めて重大なことをスラスラ話し始めた。いわゆる「大福密約説」である。

「大福が都内某所で会った時、ボクもその場にいたんヨ。そこで福田さんが『自分が2年やったら、次は大平さん、あなたに政権を渡す』とはっきり言ったんヨ」。

アングラ情報としては流れていた大福密約説を当事者からマイクに拾ったのは初めてであった。「おしゃべり六」の面目躍如であった。

会議は踊るゝボンの一夜

政治記者としてサミット取材も何度かこなした。忘れられないのは昭和60年、中曽根首相の西独ボン・サミット訪問である。首脳会議が終わった夜、市内の由緒ある古城で、西独コル首相主催の晩餐会があった。記者団も招待されたが、皆本社への送稿が忙しく誰も行かないので、レポート送りを終えた私はNHKの某記者と2人で出かけた。

会場の広間はこじんまりとした部屋で、ブラックタイで正装し、着飾った首脳と随員が狭い部屋にひしめいている。こちらは普段のヨレヨレになった背広姿で「ヤバイ」と思ったがままとばかり、出されたグラスを持って広間に入った。

最初に目の前に飛び込んできたのが鮮やかなブルーのドレスに着飾ったサッチャー英首相だった。「ハウ

「ドウユドゥー」と優雅に手を差し伸べ、ペラペラ話しかけてくるではないか！ ドギマギ、頭は真っ白、「サンキュー、サンキュー」ととんちんかんなことを言っていて、ほうほうの体で離れようとして後ろを向いたら、ミッテラン大統領とぶつかった。あわてて「ごめんなさい」とフランス語で言おうとしたが、言葉が出てこない。大統領は眼光鋭く「何だ、このジャポネの記者は」と言いたげに私をにらみつけた。

とにかく隅の方へ行こうと壁に逃げたら、随行の竹下登蔵相と安倍晋太郎外相が所在なげに「壁の花」になっていた。2人とも語学はあまり得意ではないらしい。一方、わが宰相・中曽根氏は広間の中央にしゃしゃり出て、英語でレーガン米大統領と得意気に話している。思えば豪華なメンバーだった。

この時ほど、わが語学力の不足を嘆いたことはない。一度でサミット首脳との単独会見が成功したのだ。ああーしんど……。

サイゴンで従軍記者

ラジオ報道は小世帯であり、取材も広く浅くのゲリラ手法だったが、その代わり、大事件のほとんどの現場は踏むことができた。よど号、三

島由紀夫事件、浅間山荘：みな強烈な思い出があるが、中でも忘れ難いのはベトナム戦争取材である。



当時「デンスケ」といわれた録音機（筆者スケッチ）

私がサイゴン（現ホーチミン市）に飛んだのは昭和47年、パリ和平協定の交渉が始まり、現地で和平の動きを探ろうというものであった。サイゴン市内のホテルの部屋で旅装を解いてホッとしたとき、ボーンという鈍い音とともに、窓ガラスが割れた。びっくりして部屋を飛び出し、フロントに聞いたところ「ベトコンのプラスチック爆弾、いつものことさ」と事もなげで、戦場に来たことを実感した。翌日、米軍の司令部に向かい、プレスカードをもらった。ヘルメットも買い込んで従軍記者に早変わりした。

市内には米兵専用のバーが何軒かあったが、ベトコンのテロを防ぐため、すべての店は鉄条網で覆われていた。私も何度かこの「檻の中」の店に行ったが、飲みに来ていた米兵は皆若かった。20歳位か、あどけない顔の米兵もいた。マリファナを吸

いながら、「俺たちは何のために、アジアのこんな遠くに来ていんだ」と酔って泣いていた。映画「プラトーン」の世界がそこにはあった。ある日、私の専属だったシクロ（人力車）の運転手が姿を消した。50がらみの人のよい男だったが、代わりに来た運転手に聞いたところ、「彼はベトコンのスパイだった。正体がバレそうになったので消えたんだ」。戦火の街は噂と混乱と騒擾に包まれていた。

私のベトナム取材は一カ月で終わったが、この3年後サイゴンは陥落した。その後、ベトナムには行っていないが、一度行ってみたい。そしてあのベトコンだったシクロの運転手にも会ってみたい。今ごろはベトナム共産党の幹部になっているかもしれない。

昭和天皇崩御のとき

政治記者として三角大福中の「永田町戦国史」を取材できたことはラッキーだった。

そしてロッキード事件、衆参ダブル選挙での中曽根自民党圧勝、リクルート事件等々、忘れられない取材が数々あったが、その中で特筆したいのは何と言っても昭和が終わった日、「昭和天皇崩御」だ。

昭和63年9月、昭和天皇が吐血され重篤になられてから、わが社も「その日」に備えてのプロジェクトチームができた。私は志願してチームのキャップになった。

私は「昭和」に特別の思い入れがあった。昭和20年、中国・旧満州に生まれた「引き揚げ世代」の私だが、引揚船の中で3歳上の兄を栄養失調で亡くした。私も死ぬ寸前だったが、母親の必死の看病で帰還することができた。

7年前に亡くなった母親は、中国残留孤児のニュースが出ると必ずテレビを消した。つらくて見られないといつも言っていた。戦争とは、昭和とは、何だったのだろうか。私は「昭和の時代」をもう一度、振り返りたかった。

真冬にしては暖かかった昭和64年1月7日、「崩御」が発表された。それから2日間、CM抜きの特別番組が編成され、私はメインキャスターとして自分なりの感慨を胸に「昭和の終幕」を語り続けた。

にしやま・ひろみち 1945年生まれ 69年文化放送入社 報道記者 ニュースキャスター 報道部長 編成局次長などを経て 05年退社 現在 拓殖大学非常勤講師

「谷垣禎一君、102票」。9月20日午後2時50分、谷垣禎一氏の獲得票数が読み上げられると、自民党本部8階ホールは一瞬、どよめいた。安倍晋三氏の464票には遠く及ばず、麻生太郎氏の136票の後じんを押したとはいえ、地方票とあわせて3ケタに乗せた。谷垣氏は目を潤ませながら、じつと壇上をみつめていた。

■「強いって何ですか」

昨年10月の内閣改造で財務相に留任。小泉内閣で長く重要閣僚を占めて「ポスト小泉」の候補の一人となつたにもかかわらず、谷垣氏の腰は重かった。世論調査では安倍氏が独走を続け、谷垣氏の支持率は1ケタ台に低迷していた。4月に入り、気をもんだ谷垣派幹部が財務省の大臣室に駆け込んで決起を促したことがある。「国民が求めるのは安倍さんのような強いリーダー像です。もっと強さを表に出してください」。谷垣氏は珍しく、語気荒く反論した。「強いって何ですか。強いだけではいかにも軽佻浮薄じゃないですか」。

保守本流の宏池会（旧池田派）出身を強く意識する谷垣氏には「財務相としての任務を着実にこなしてこ

そ、総裁選への道が開ける」という信念があった。「骨太方針2006」を閣議決定し、財務相としての仕事有一段落した後の7月21日夜、谷垣氏は都内のホテルで開いた同派会合でようやく明言した。「これからエンジンをかけていく」。

福田康夫氏の不出馬表明ですでに党内の大勢は決していた。谷垣氏は「自民党はやせ細ってはいけない。国民の多様な意見を取り入れ、党というるつばで溶かしながら、政策を鍛え上げなければならぬ」と、安倍氏支持で雪崩を打つ党内情勢に警鐘を鳴らしたが、福田氏の潜在的な支持票の受け皿にはなれなかった。

■2対1にもひるまず

ただ9月に入り総裁選の論戦が始まると、少しずつではあるが雰囲気が変わり始めた。消費税率引き上げの必要性、歴史認識、アジア外交

……。控えてきた小泉政権への批判も口にするようになり、安倍氏や麻生氏との「2対1」の論戦でもひるまずに持論を主張し続けた。

周囲には早くから、安倍氏との違いをより強く印象づけるため「財務相を辞任した方がいい」という声があった。しかし谷垣氏は耳を貸さなかった。理由を聞くと「小泉さんが財務相を2期務めさせてくれたからこそ総裁候補になれたんです」。谷垣陣営の一人は「闘士になりきれたくない」と渋い表情を見せたが、近くで取材を続けた自分は「谷垣さんらしい考え方だ」と思った。

9月20日。朝刊に「安倍総裁きょう選出へ」の見出しが並ぶなか、谷垣氏は投票直前まで派閥事務所にもり、態度が未確定とされる議員の携帯電話を鳴らして支持を訴え続けた。「サブライズになるような結果にしますよ」。電話ではそんな答えもあった。善戦を信じて党本部に向かう

谷垣氏。その時点での自分の「票読み」は、70—80票。結果として20—30票を上積みしたことになる。

投票直後の両院議員総会で安倍新総裁が選出された後、選対本部に戻った谷垣氏は待ちかまえた議員一人一人と握手をかわした。「私の主張を党の主流にできるよう精進していきたい」。陣営は大きく沸いた。

■愚直に遠回りでも

派内からは「次期総裁候補として認知された」との声が上がるが、谷垣氏から「石にかじりついてでも首相になつてやる」という気迫が最後まで感じられなかったのも事実だ。予想以上の善戦は谷垣氏の現時点での総裁候補としての限界も示した。

谷垣氏は財務相の職を離れ、閣務に専念する。谷垣派には党三役も、閣僚ポストの割り振りもなかったが、人事で干されたからこそ、次の政局でフリーハンドを得たとの見方もできる。愚直に持論を唱え、安倍政権との対抗軸を鮮明にしていく。遠回りかもしれないが、それが「102票」を上積みする道に思える。

番記者が見た谷垣候補の挑戦

総裁選102票

▼地曳 航也

(日本経済新聞社)

じびき・こうや 2003年入社 名古屋支社を経て 05年から政治部

「男の子」出産！速報打って！」

皇室に41年ぶりの男児誕生、その第1報を日本テレビが独自で速報することを決断したのは、9月6日午前8時46分20秒。宮内庁が正式発表する120秒前の出来事だった。その舞台裏の一端を披露させていたのだ。

紀子さまご出産当日に特別番組を編成するため、社会部を中心にプロジェクトを組んだ皇室特別取材班。ご懐妊当初から、関係各方面に広く取材を展開していた。その取材メモからは、面白いチーム取材ができていることがわかっていった。

■間違ったら世紀の誤報

予定日の迫ったある日、担当デスクが真顔で聞いてきた。

「もし確かな情報源から発表前に情報がとれた場合、1本の場合は原則通り、裏どりしてから速報ですよ。ね？」「ん：間違ったら世紀の誤報だな」。思わず言葉に詰まる。

まさに捕らぬタヌキの皮算用だが「とれたら歴史的スクープ、誤報ならクビではすまないな」と。もちろん、この時はただの与太話のつもりだった。

ご出産当日は、各社、緊急速報態

男児誕生

速報「120秒の独走」舞台裏

▼杉本 敏也

(日本テレビ)

勢を敷いていた。日本テレビでも皇室特別取材班を中心に宮内庁、愛育病院ほか6か所の生中継含め、総勢70人規模の取材陣を配置した。

宮内庁には記者6人を配置、速報対応に長けた警視庁、司法担当の事件記者が「壁耳」や「他社動向ウオッチ」を担当し、他社に抜かれた場合も確実に2着を狙える態勢。情報が伝達されるルートはすべて掌握した上で、記者を張り付け、万全の布陣で臨んだ。

■リポーターの耳に秘密兵器

さらに、宮内庁から第1報リポーターを担当する町亞聖記者の耳には普通の音声送り返し用のイヤホンに加え、もう一本、本社デスクからの専用線を割り込ませていた。これなら、本社デスクの指示がどこも経由せずに直接リポーターの耳に入り、視聴者に瞬時に伝えることができる。有事

必勝アイテムとしてディレクターと技術スタッフが仕掛けた秘密兵器だ。

その成果が、さっそく現れはじめた。紀子さまが「手術室に入られた」事実を7時50分、町記者が他社に先駆けて伝えた。固唾をのんで取材を続ける中、その吉報は、突然、飛び込んできた。

そして、数分後、その瞬間がやってきた。社会部デスクから町記者の耳に伝えられ、瞬時にリポーターで「秋篠宮妃紀子さまが男のお子様を出産されました」。同時に速報が字幕表示された。

■静寂から拍手へ

その瞬間の本社報道フロアは、異様なほどの静寂に包まれていた。早朝から他部門のスタッフも含め大勢が陣取る中、報道局全体が他メディアを注視し、どこが、いつ、どのよう

いた。

2分近い独走状態の後、宮内庁の発表を受けて堰を切ったように全社が速報を始めた。

それまで興奮状態にあった報道フロアもようやく我に返り、どこからともなく、拍手がわき起こった。

■フロアの撮影テープは封印

実は「その時の報道フロアでの出来事」の一部始終を撮影したビデオテープが存在する。しかし、このビデオは、おそらく永遠に放送されることはない。そこには、報道機関の根幹に関わる情報入手から裏どり、放送に至るまでのプロセスが収録されているからだ。

ところで：恥ずかしながら、その瞬間、他社のスクープを警戒して、その社のネタ元と目される関係者に電話取材をし続けるという涙ぐましい努力をした記者もいた。果たして意味があったかどうかは不明だが、「120秒の独走」はこうした連係プレーのためものだった。

すぎもと・としや 1984年入社
警視庁キャップ 真相報道バンキシャールC
Pなど経て 06年7月から社会部長

TDK都市対抗優勝

勝利に酔いしれる ハイテクの街



▶ 齋藤 純一
(秋田魁新報社)

第77回都市対抗野球大会で、TDK硬式野球部（秋田県にかほ市）が東北勢として初の優勝を果たした。これまで8度出場しながらいずれも1回戦で涙を飲んだチームが、名だたる強豪をなぎ倒した末の栄冠だった。同社の企業城下町が形成される「にかほ市」は昨年10月に発足したばかり。地元チームの快挙はビッグな誕生プレゼントとなり、市民みんなが快進撃に酔いしれた。

年間売上高およそ8000億円を誇るグローバル・カンパニー、電子部品メーカーのTDKが、秋田県南西部に位置する人口3万の地方都市にルーツを持つことは案外知られていない。

同社の初代社長・故齋藤憲三（元科学技術政務次官）は同市（旧仁賀保町）の出身。郷土の発展を願った齋藤は、農家の二男、三男の働く場を確保しようと昭和15年、東京電気化学工業（現TDK）の工場を旧仁賀保町に開いた。現在、市内では5工場が稼働。市民の多くが同社と関連企業で働き、地域が享受するTDKの恩恵は計り知れない。

それだけに今回の優勝は、市挙げてのお祭り騒ぎとなった。にかほ市とお隣の由利本荘市は、首都圏在住の出身者らにも呼びかけて、初戦から東京ドームに大応援団を送り込んだ。準決勝からは、にかほ市内3カ所でパブリックビューイング会場が設営され、多くの市民が大型スクリーンに声援を送った。決勝戦当日はにかほ市の9月定例議会の初日だったが、午後からの議事日程を延期し、横山忠長市長と議員団が急ぎよ上京。市は9月22日、TDK硬式野球部に市第1号の市民栄誉賞を授与し、県民栄誉章贈呈も決まった。



優勝パレードでナインを温かく迎える市民たち

商店街は早速優勝記念セールを開催、プレミア付きの市内共通商品券も飛ぶように売れた。市内の酒屋には祝賀会向けの注文が殺到。あるホテルのレストランでは「TDK野球部パフェ」「優勝！TDK釜炊き御膳」なるメニューもお目見えし、地元信金は優勝記念定期を発売した。優勝は「祝賀需要」も少なからず喚起しようだ。

一方、チームは決勝戦翌日には地元に戻り、市内3地域をパレードして優勝を報告。あいにくの雨にもかかわらず、報告会には計約4000人が集まり、ナインを温かく迎えた。「仕事もこなしただ上で練習するのが本来の社会人野球」。こんな気持ちから、午前中は勤務、午後は練習というそれまでの冬場のスケジュールを返上し、終日勤務後の夜間練習を重ねてきた選手たち。その努力に心から敬意を表したい。

一口メモ にかほ市

人口 29,273人（8月31日現在）
世帯数 9,373世帯（同）
面積 241平方キロメートル
秋田県南西部、山形県境に位置し、西に山、東に海、南に日本海、北に奥の細道。2004年10月に発足した。主要産業は農業、漁業、工業。仁賀保地区は、かつては、日本を3業、齋藤金浦地帯は、南極探検の拠点。象潟地区は、白瀬聖たどりの名所として知られる。

さいとう・じゅんいち 1988年入社
整理部 社会部などを経て 2004年
4月から本荘支局長

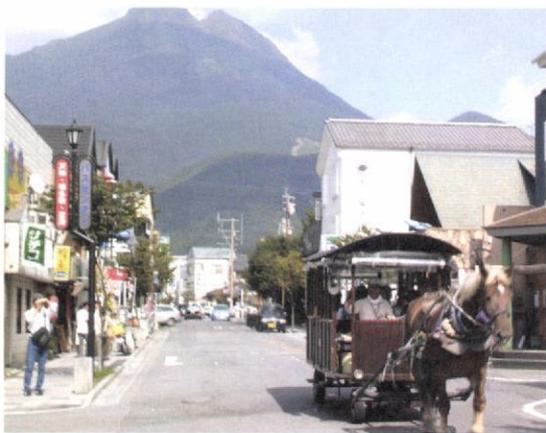
大型旅館建設問題

ゆふいんブランド
希薄化の危険性も

▶百崎 浩嗣
(大分合同新聞社)



大分県のほぼ中央に位置し、年間300万人以上が訪れる由布市湯布院町・由布院温泉。のどかな田園地帯に小規模旅館が点在する「癒やしの里」として人気を集めてきた全国有数の温泉地が今、外部資本による大型旅館の進出計画に揺れている。地元観光業界は「小さな宿が集まる由布院にそぐわない」と反発したが、由布市は9月、法令上問題ないとして計画を容認する方針を発表。行政と観光業界の足並みが乱れる中、今回の進出問題は、「九州の奥座敷」という由布院温泉のイメージにも微妙な影響を及ぼしている。



由布岳をバックに辻馬車が走りのどかな風景が魅力の由布院温泉

計画が浮上したのは昨年6月。学生寮やホテルを全国展開する「共立メンテナンス」(本社・東京)が、同温泉周辺部の敷地約1万8000平方メートルに部屋数78室、延べ床面積5542平方メートルの旅館建設を計画し、旧湯布院町(現・由布市)に申請書類を提出した。しかし、地元の旅館組合に加盟する旅館の平均客室数は15室程度。大型進出に危機感を募らせた観光業界は計画反対を訴え、企業と市に規模縮小を求めた。

同社は建設規模の見直しに応じ、部屋数を55室まで削減。由布市は「企業側の努力もあり、やむを得ない(首藤奉文市長)として計画を容認した。同時に、今後は延べ床面積3000

平方メートル以上の大規模宿泊施設の建設は認めない方向で条例改正する方針を打ち出し、反発を続ける観光業界の沈静化を図った。

由布院温泉の大規模開発に対するアレルギーの背景には、競争激化への懸念とともに、外部資本による大型リゾート開発が押し寄せたパブル期の苦い記憶がある。地価の高騰で農業者の土地離れが深刻化し、無秩序な乱開発が自然や景観を壊しかねない危機に陥った。

このため旧湯布院町は1990年、「美しい自然、魅力ある景観はかけがえない財産」を理念に掲げた「潤いのある町づくり条例」を制定。新たな建築物の高さを制限し、1000平方メートルを超す開発行為には町長(現市長)の同意を求めると、建築関係法令に独自の厳しい規制を上乗せして大規模開発を抑制してきた。条例は、旧湯布院町が隣二町と合併し、由布市となった現在も地域限定条例として引き継がれている。

ただ、今回の計画も条例の適用対象として、市長は計画の是非を協議する「まちづくり審議会」に諮問したが、審議会は賛

否両論を併記して答申。由布院には景観に配慮しない看板が現れ、進出業者と住民とのトラブルも相次ぐ。条例の理念と現状には大きな隔たりが生じている。

地域づくりの先進地としても知られる旧湯布院町。映画祭や音楽祭などの独自イベントで「ゆふいん」を全国にアピールする一方、街並みから派手なネオンなど歡樂的な要素を排除し、地域ブランドを確立した。大規模開発はこうして築き上げてきた「由布院らしさ」を希薄化させかねない危険性をはらむ。それだけに、今回の大型旅館進出計画は観光地・由布院の方向性を占う上で一つの分岐点になると言えそうだ。

ももさき・ひろつぐ 2002年入社
政治部を経て 04年から由布支局

一口メモ 由布市
人口 36,699人 (9月1日現在)
世帯数 14,572世帯 (同)
面積 319.16平方キロメートル
昨年10月に湯布院町、庄内町、挾間町が合併して誕生した。温泉リゾート地と知られる湯布院地域は、今春まで放映されたNHK朝の連続テレビ小説「風のハルカ」の主舞台となった。年間を通して、ゆふいん音楽祭(7月下旬)、湯布院映画祭(8月下旬)、牛喰い絶叫大会(10月上旬)など住民手作りのイベントが開催されている。

2001年9月11日にニューヨークで特派員をしていた。どうしたのか、と聞かれることが多い。その日は、実は思い出したくもない。

支局ビルの手前の交差点で、携帯が鳴り、事態を知った。支局に駆け込んだのは、世界貿易センターに2機が突入した直後だった。朝刊の締め切り前。マンハッタン島内にいた記者や助手に連絡し、現場に向かってもらう。

そして、助手2人に、世界貿易センター内の会社に電話をかけるよう指示した。火災や地震、大きな事件事故の際に付近の住民や会社に片っ端から電話を入れて様子を聞くというのは、定石ではある。しかし、恥ずべき、ばかな作業だった。ツインタワーが崩落するとは、思わなかった。映画「ワールド・トレード・センター」は、2人の港湾警察官、ウィルとジョンとその家族の「9・11」を描く。2人は、貿易センタービル上部に閉じこめられた人たちの救出に向かおうと、酸素ボンベを地下倉庫から集め終わったところで、倒壊に巻き込まれてしまう。ヒーロー的な活躍の余地は皆無だ。

事件後、殉職した消防士や警察官

●「9・11」の実相

に注目が集まった。遺族補償をめぐって、消防士や警察官が特別扱いされるのはおかしい、という声。その他の遺族からあがった。そのうち、米同時テロの犠牲になった人たちは、みなヒーローと呼ばれるようになった。

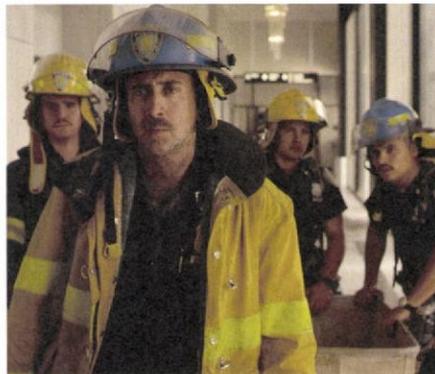
5年たつて封切られたこの映画は、虚飾性をはぎ取って、あの日何があったかを冷静に再現している。負傷者が運び込まれた

病院には、「行方不明」

になった肉親を探す多くの家族が殺到した。ジョンの妻、ドロシーは息子を探す黒人女性と言葉を交わす。「きのう息子を怒鳴りつけたのよ。帰ってくるのが遅くて、せっかく作った夕食が無駄になったから」と泣く女性を抱きしめる。

米国を、世界を変えてしまった「9・11」。政治的思惑で実像がゆがめられることもあった。多くの人が苦しみ、悲しみ、手をさしのべあつた原点の風景は、忘れられてはならない。

河野 博子
(読売新聞編集委員)



ワールド・トレード・センター

●6メートル下の地獄

映画を見てマンハッタンのあの日の青く澄んだ空が鮮明に蘇った。私も最初、主人公らと同じように「下手なパイロットだな」と呆れて支局に駆けつけた。

ただ、その青空を一直線に切り裂きWTCに突入するハイジヤック機や崩落するビルの映像

は映画に出てこない。現場近くで働く普通の警察官にとつて地上を這う巨大な機影と不気味な衝突音が彼らの悲劇の始まりだった。

オリバー・ストーン監督は「JFK」で独自の解釈を展開し陰謀説を

主張した。が、今回はひたすら瓦礫の下に取り残された2人の警察官を描く。その分、ドキュメンタリー以上の緊迫感が出た。当時、メディアは24時間体制の報道を続けた。しかし、鉄筋が折り重なった6メートル下の地獄は伝えられていない。

実際、WTCに出勤して被災し

た警察官や消防士は市民から絶大な尊敬を集めた。たまたまビルに居て被災した人は気の毒だが仕方ない、しかし、危険を予測して救援に向かった人は偉い、この区別は良く出ていた。

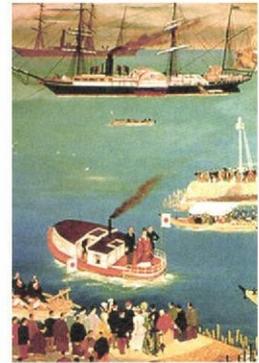
私も、死亡した消防士の夫の保存精子で、もうひとり子どもを生むという主婦を取材したことがあった。

アメリカはテロ後、アフガニスタンを潰し、イラクにも侵攻した。あんな酷いショックを受けたのだからそのくらい仕返ししないと収まらない、大量破壊兵器の有無やアルカイダがイラクと共謀したかどうかは実は関係ない、当時よく聞いたアメリカ人の本音を思い出した。

事件から3日後の9月14日、ブッシュ大統領は映画の舞台となった瓦礫の上で消防士と警察官から「USA, USA」の大合唱で迎えられた。アメリカがひとつになったと感じた瞬間だった。しかし、現在、ブッシュ大統領はイラクや中東政策をめぐり孤立を深めている。何をやってもうまくいかない。こんな展開を5年前のWTCのヒーローたちは誰も想像しなかっただろう。

星野 誠
(TBS報道局編集センター長)

岩倉使節団の米欧回覧



横浜から出港

志高き六三二日の旅——「実記」もとに再現

節団の平均年齢は32歳。最年長の岩倉でさえ47歳である。だれもが吸い取り紙を上げたように米欧の国情を存分に吸収できたのも、若さの特権に違いない。

岩倉使節団の「米欧回覧実記」がDVD化された。DVD版は「実記」に挿入された銅版の風景画をデジタル処理し、新たに写真や絵画を多数加えて、鮮明で美しい回覧絵巻になった。

DVD2枚組、計165分の旅を先導するのはNPO「米欧回覧の会」代表で、岩倉使節団の研究者、

泉三郎氏である。泉氏は自ら解説とナレーションを引き受けている。ナレーションには「実記」を離れて、使節の書簡や談話が効果的に引用さ



岩倉具視(中央)と右から大久保利通、伊藤博文、山口尚芳、木戸孝允の若きリーダーたち

れている。おかげで岩倉使節団というこの情報収集集団の実像が浮かび上がった。

以下は蛇足的感想——。

①久米邦武の筆になる「米欧回覧実記」の文章は力強い。文語体で米欧諸国を叙述する緊張と気迫が、このような雄渾な文体を生んだのだろう。

②使節団は実にいい顔をしている。司馬遼太郎氏のいう「魂の分量の多い顔」だ。ひるがえって当今の日本。情報の分量は途方もなく多くなった。魂の分量のほうは？

毎日新聞特別顧問 諏訪 正人
*DVD版は慶応大学出版会から発売されています。

※会議報告

第275回会報委員会

(9・8 小会議室)

新委員の池谷忍共同通信内政部長(豊田幸氏と交代)が紹介された後、10月号の編集や「リレーエッセー」などについて協議した。

出席 住田委員長、池谷、石田、伊藤、仙石、高橋、西田、松本の各委員。

第357回企画委員会

(9・12 宴会場)

新委員の國府一郎新聞協会編集制

作部部長(鳥居元吉氏と交代)が紹介された後、前日に行われた自民党

総裁選立候補者による討論会について意見交換した。今後のゲスト候補や研究会などについても協議した。

出席 宇治委員長、宮田(謙)、山田、中井(良)、橋本、中井(康)、脇、春名、田崎、菅沼、川戸、井田、和田、國府、三好、藤村の各委員。

第168回施設運営委員会

(9・13 シルバールーム)

7、8月のアラスカ売上と貸室利

用状況を事務局から報告した。

出席 石村委員長、高橋、加藤、阿部、梅田、池浦、中村の各委員。

第349回会員資格委員会

(9・13 小会議室)

10月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 高畑、伝川、泉、二藤部、今井、田中、柿原、今田の各委員。

第430回理事会

(9・21 アラスカ)

一、副理事長にNHKの石村英二郎理事を互選した。二、総務委員長に朝比奈豊毎日新聞常務取締役・主筆を、施設運営委員長に金平茂紀TBS執行役員・報道局長を委嘱した。

出席 滝鼻理事長、吉田、石村の両副理事長、岩崎専務理事。朝比奈、住田、竹田、岸田、宇治、高橋、安川、目、村松、花田、金平、吉野、熊村、佐藤(重)、高木、佐藤(嘉)の各理事。中西、舟橋の両監事。

リスボン・プレスクラブ

「来訪歓迎。レストランは10%割引にします」。クラブのホームページにポルトガルのジャーナリスト・クラブからメールが届いた。外国からのアクセス第1号だ。この話を事務局から聞いて8月末、リスボンへ旅をした際、ここを訪ねた。

国会に近い、石畳の通りに面した建物のドアを入ると、中は意外に広い。室内と、一階下がった中庭に広がるレストランを中心に談話室やバー、ピリヤード台を置いた部屋などが整っている。前日、電話しておいたせいか歓迎のシャンペンが待っていた。

支配人のアンドレ・マガレニヤスさん（写真・円内）は、新



日本の仲間を歓迎します

聞、放送、出版に関係する700人の会員がいて、ここを仕事の打ち合わせや、くつろぎの場になっている、という。ここでインタビュが行われることはあるが、記者会見はないようだ。機関誌「ジャーナリストたち」も発行している。

レストランは会員以外も利用できる。近くの各国大使館から外交官たちがよくやってくる、というのがご自慢だった。昼時だったから「軽いものを」と頼んだら手のひらほどの椎茸にチーズや野菜をどっさり盛った、お国料理が出てきた。10%引きで10ユーロ（1500円）弱を払った。出張や旅行で行ったとき、ここならアットホームな感じで食事ができるだろう。マガレニヤスさんの「顔」も頼りになりそうだ。

トウルナス通りに面した入り口

マガレニヤスさんから後日、「村野氏をお迎えできたことは光栄でした。日本記者クラブのすべての会員の皆様のおいでをお待ちしております」とのメッセージが事務局に届きました。

The Lisbon Press Club
Rua das Trinas, 127-r/c
1200-857 LISBOA PORTUGAL
tel +315 21 3977138
Mail cjrestaurante@netcabo.pt
www.clubedejournalistas.pt

朝日新聞出身 村野 坦

自民党幹事長

浅川 博忠

（山形新聞客員論説委員）

平成8年に橋本首相で自民党が政権政党に復帰して以来、安倍新首相は5人目の首相となる。この中で幹事長ポストを経験していないのは小泉前首相のみ。やはりこのポストは最高位への登竜門なのだ。しかも安倍氏は祖父、実父と3代に及ぶ幹事長経験者。300億のカネと800のポストを握る強大な権力と職務。この椅子の変貌ぶりや辞任後の明暗。歴代幹事長の総てを本書で探るのはそのまま結党51年の自民党史にも通じよう。（講談社文庫 620円）

マイBOOK マイPR

ニッポン偉人奇行録

前坂 俊之

（毎日新聞出身）

伊藤博文、吉田茂、川端康成、南方熊楠、内田百閒：明治、大正、昭和の日本を作った各界の代表的偉人たち約50人の思わず噴出す面白いエピソードを満載した。

「偉人は天才、奇人、変人なり」との視点から、その栄光の裏に隠された人間味あふれる奇行、ジョークの数々を白日の下にさらした抱腹絶倒の人物記。コラムを執筆する記者にとってはニヤリ、ピリ辛の隠し味となるネタ本になること受け合いの1冊です。（ぶんか社 660円）

◆将棋の会◆9月9日

大野八一雄6段（フリークラス）

と安食総子女流初段との、恒例の指導対局に8人が挑みました。同好会創立（99年）以来、14回目になりましたが、プロとの距離はなかなかつかまりません。それでも、以下の5人（敬称略）が接戦をものにしました。

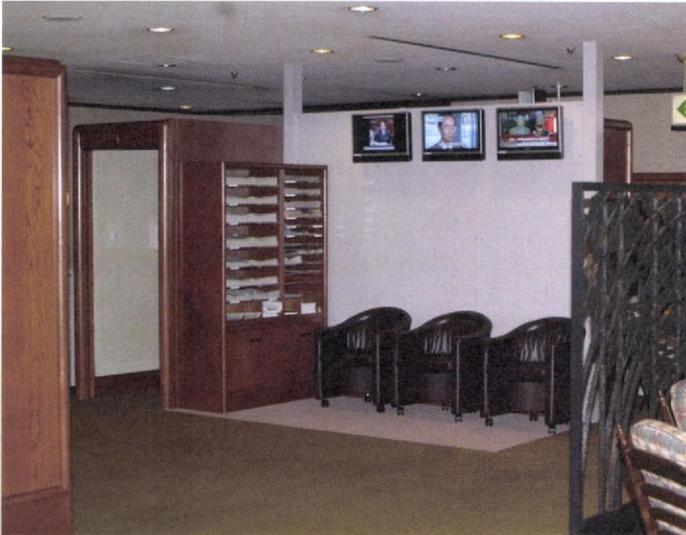
△対大野戦▽飛車落ち 林茂雄（中日出身） 飛車香落ち 白木東洋（毎日出身） 二枚落ち 日比野和幸（朝日出身） △対安食戦▽飛車落ち 重定尚志（民放連出身） 二枚落ち 近藤卯一（特賛）

○囲碁の会● 9月30日

夏休みをはさんで、2カ月ぶりの例会。参加者は25人、総対局数は42局でした。

優秀賞は西崎哲郎、堀川敏雄、中俣富三郎、有賀忍（以上3連勝）、吉川真澄（5勝1敗）、塚本一、箱崎道朗（以上3勝1敗）のみなさんでした。

次回の例会は10月28日（土）午後1時から宴会場で行います。初参加の方も大歓迎。ふるってご参加ください。



ラウンジの様子が終わりました

9月下旬に、ラウンジの電話ブースを一部撤去し、改装工事を行いました。ここに液晶テレビを設置し、新聞閲覧用のスペースもつくりました。これで5月の喫煙室新設に伴う改修工事をすべて終了しました。

4つあった電話ブースのうち3カ所を取り払いましたので、わずかですが、ラウンジの空間が広がりました。1カ所は残しましたので、これまで通り、携帯・公衆電話の通話ならびに呼び出し電話の接続用に利用できます。



テレビモニターは3台あり、2台はCS放送用です。BBCワールド、ブルームバーグ(英語版も)、CNN、朝日ニュースター、TBSニュースバード、日経CNBC、日テレNEWS24の視聴が可能になる予定です。1台は国会テレビ専用です。これらの番組ソフトを無償で提供していただけるよう会員各社にお願いしています。常時音声を出していませんが、聴取希望の方はイヤホンをお貸ししますので、受付へお申し出ください。

このスペースに新聞棚を移し、いすを置き、新聞を読めるようにしました。

また、新聞棚の上に地震速報用の専用装置を取り付けました。この装置は気象庁の緊急地震速報を基に、瞬時に予想震度と予想到着秒数を計算します。予想震度3以上を対象に、到着までの秒数を音声と電光掲示で知らせてくれるようになっていきます。警戒情報として、有効に利用したいと思っています。これも高橋利行会員(東京ケーブルネットワーク常務取締役)の協力で無料で実現しました。(石川)

クラブHP「会見速記録」このコーナーには、以下のような研究会の記録も収録されています。記事執筆の資料としてご利用ください。

【憲法】長谷部恭男「立憲主義と平和主義」(06・3・13) 西修「憲法改正論議…比較憲法的視野も含めて」(06・3・15)

【東アジア共同体】D・シアン「私見・地域統合への道」(05・4・6) 田中均「東アジア共同体への展望」(05・4・11) F・バーグステン「東アジア共同体と世界経済」(05・9・

2) 韓昇洙「東アジア共同体についての個人的見解」(05・9・14)

【北朝鮮】田中均「北朝鮮との交渉はトップの権威のもとで」(06・5・15)

【中国経済】清水美和「現代中国「格差」の本質」(05・11・16) 嚴善平「中国における農業、農村、農民および農民工―四農問題の実態と政策転換のプロセス」(06・2・17)

【中東ペーシック】保坂修司「入門、サウジアラビア」(05・5・25) 内藤正典「欧州と中東」(05・6・17) 藤原和彦「現代エジプト政治を

読むポイント」(05・7・8) 田中浩一郎/畔蒜泰助「イラン核問題―その背景と展望」(06・3・27)

【社会保障改革】大沢真理「多様化するライフスタイルにふさわしい年金制度を」(04・6・11) 宮島洋「年金改革から社会保障改革へ」(04・7・27) 辻哲夫「医療制度改革の厚労省試案」(05・10・27)

【司法制度改革】佐藤幸治「司法制度改革の意義と位置づけ」(04・5・11) 宗像紀夫/後藤貞人「裁判員制度で変わる捜査、裁判」(05・8・18)

寄贈書

創刊百三十周年記念

愛媛新聞年表/「坊っちゃん」とたどる明治の松山 愛媛新聞社

自由民主党捕鯨議員連盟の二十年 水産経済新聞社

招待券(ご寄贈いただきました)

片岡護会員から「新芸術展」を、日本新聞協会から「新聞の魅力展―アナログとデジタル」の招待券をご寄贈いただきました。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■世界人口白書2006記者発表

国連人口基金（UNFPA）「世界人口白書2006 希望への道—女性と国際人口移動」の発表会見が行われた。白書は約2億人とされる移民の人権擁護や、当事者と出身国、受け入れ国にとって実りのある人口移動を訴えている。（8.30 宴会場）

国連人口基金 <http://www.unfpa.or.jp>

■中毒110番無料に—中毒情報センター会見

誤飲や急性中毒の応急処置の相談に応じている「中毒110番」が無料化されることになった。これまではダイヤルQ2で有料だったが、今後は通話料だけでよく、携帯電話からもかけられる。（8.30 大会議室）

電話番号は▽つくば中毒110番（9時～21時）：029-852-9999▽大阪中毒110番（24時間）：072-727-2499▽たばこ専用電話（24時間）：072-726-9922

照会先：日本中毒情報センター Tel：029-856-3566

<http://www.j-poison-ic.or.jp>

■CAIS・1周年記念講演会

通訳者の技術・生活向上サポートを通じて社会貢献することを目的に設立されたNPO通訳技能向上センター（CAIS）が1周年を迎えた。グレン・フクシマ氏が講演した後、「ビジネス通訳の現場から」のテーマでパネルディスカッションも行われた。（9.2 10階ホール）

照会先：通訳技能向上センター事務局 Tel：03-3539-3915

■「高松宮殿下記念世界文化賞」受賞者発表

日本美術協会（瀬島龍三会長）は世界の優れた芸術家に贈る第18回の受賞者に、前衛芸術家の草間弥生さんから5人を選んだ。発表会見では中曽根康弘同賞国際顧問もあいさつした。（9.4 宴会場）

照会先：日本美術協会 Tel：03-5251-2245

<http://www.praemiumimperiale.org/jp>

■在日米商工会議所（ACCJ）：プレスリリース発表

報告書「誠実な企業活動—企業の社会的責任（CSR）のあるべき姿と展望」の発表会見が行われた。

（9.7 10階ホール）

照会先：在日米商工会議所広報 Tel：03-3433-6542

<http://www.accj.or.jp>

■千代田プレスクラブ講演会

民主党の渡部恒三国対委員長が民主・自民両党の党首選について講演した。（9.14 大会議室）

■日本科学技術ジャーナリスト会議月例会

渡部潤一国立天文台助教授（天文情報センター広報室長）が「太陽系惑星の定義決定の経緯と報道」をテーマに講演した。（9.15 宴会場）

日本科学技術ジャーナリスト会議 <http://www.jastj.jp>

新しいOB会員

■日本ジャーナリスト懇話会9月例会

「北朝鮮は崩壊するか—ミサイル発射と先軍政治の行方」のテーマで、河田卓司読売新聞国際部次長が講演した。（9.20 大会議室）

■ドイツ赤ワイン スモールテイस्टینگ

金融界などに勤めるドイツの若者たちに人気だというドゥイン醸造所（バーデン地域）のビンテージもの5種類を、日本の“ヒルズ族”“IT族”などが読者層のビジネス誌や男性誌、ワイン雑誌の記者らにPRした。ドイツは白ワインが有名だが、現在は総生産量の約30%が赤ワインとのこと。（9.27 大会議室）

照会先：ドイツワイン基金駐日代表部（ドイツ商工会議所内） Tel：03-3511-4033 <http://www.dwfjp.com/index.html>

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



**新シリーズはJ A Z Zをテーマに
10月は「イパネマの娘」です**

これから1年間は、懐かしいスタンダードジャズをテーマに、カクテルとノンアルコール・ドリンクの2種類をおたのしみいただけます。10月のノン・アルコールドリンクはグレープジュースをメインに、カクテルはそれにジンをアレンジした「Sleeping Beauty」です。両方とも吉富オリジナルです。お試しください。



**個室での忘年会・新年会プラン
(11月20日～07年2月17日)**

メニューを一新し、お手軽な宴会プランをご用意します。社内の集いや個人的な会合にもご利用ください。お一人3300円(洋食8品+寿司、そば、デザートつき)で、飲物・部屋代は別ですが、1200円をプラスして飲み放題(2時間)にすることもできます。なお、お酒の持ち込み料は無料です。10人からお受けします。
予約・問い合わせは3503-2724の貸室担当へ。



**割烹特製のきりたんぼ鍋を原価で
(11月20日～12月1日)**

さすが本場の味と昨年好評だった秋田名物のきりたんぼ鍋を、ことしも原価の2000円(1人前)で提供します。毎日必要な分を秋田市の割烹料理店「山路」から直送してもらいますので、必ず事前の予約をお願いします。おふたりからお受けします。

石焼き懐石 (11月10日まで)

200度に熱した石の上に、牛ロースや松茸などをのせて、ポン酢と胡麻だれ味で召し上がっていただきます。グラス冷酒つきで5250円です。(板長: 薬科浩)
先付2点: 胡麻酢和え、南禅寺蒸し 碗: 土瓶蒸し 生
物: 刺身三点盛り 焼物(石焼き): 牛ロース、松茸、舞茸など 煮物: 菊花蕪 揚物: 海老祇園坊揚げ 食事: 栗ご飯 水菓子: 柿など旬の果物



伊勢海老コース (11月10日まで)

伊勢海老のグラタン(テルミドール)がメインディッシュです。これにスープ、サラダ、デザートがついてお一人3780円です。ランチタイムにもお出しします。(シェフ: 黒須修一)

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也
高橋利行 西田善夫 松本侑壬子
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

新しい会員名簿をつくります

住所・連絡先の変更 住所非掲載を希望など
お知らせください

11月1日付で会員名簿を作成します。個人D会員と特別賛助会員の方々と、自宅や連絡先住所、現職欄などに変更がありましたら、10月20日(金)までに下記の事務局名簿担当までご連絡ください。

D会員の皆さんの場合は、原則として自宅情報と勤務先情報を掲載していますが、ご希望があればそれぞれについて掲載しないこともできます。非掲載を希望される方もお知らせください。

クラブの会員名簿は会員の皆さんにだけ配布するもので、第三者に提供することはありません。また印刷・発送業者とは会員情報の適切な取り扱いを定めた契約書を取り交わしています。

担当・齋藤 メール:saitou@jnpc.or.jp

FAX: 03-3503-7271 TEL: 03-3503-2725

<訃報>

今井彬会員(フジテレビ出身、73歳)が9月3日、急性腸閉塞のため、白土盛会員(読売出身、89歳)が同4日、心不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 807人
個人会員 1,648人 法人・個人賛助会員 76社 187人
特別賛助会員 75人 名誉・功労会員 10人
計 222社 2,727人

H P <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」: 9月の新規掲載

- 自民党総裁候補討論会「どんな国、どんな社会を目指すのか」(06.9.11)
- 司馬遼太郎氏総会記念講演「庄屋の情報を反省する」(1976.5.28)
- 土光敏夫経団連会長「正念場を迎える日本経済」(1976.12.2)

今後の行事予定 (10/2現在)

- 10.14(土) 14:00~15:50 (10階ホール)
試写会「エンロン 巨大企業はいかにして崩壊したのか?」
- 10.17(火) 15:00~16:30 (9階宴会場)
研究会「HIV/エイズ」③
山本直樹国立感染症研究所エイズ研究センター長
- 10.19(木) 12:00~14:00 (10階ホール)
シーファー駐日米大使昼食会
15:00~16:00 (10階ホール)
ロゲI O C会長記者会見
- 10.24(火) 15:30~16:30 (9階宴会場)
デア新駐日ドイツ大使記者会見
- 10.30(月) 15:00~16:30 (10階ホール)
研究会「中国」国分良成慶応大学教授
- 11.6(月) 15:00~16:30 (10階ホール)
研究会「アメリカの底流」②アメリカの宗教史から現代を読む
森本あんり国際基督教大学教授

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 中村 豊 (日本経済新聞社 写真部)



自民党本部 (9. 20)

歓呼の声に送られて

201X年、戦後内閣としては最長不副記録を達成した安倍晋三総理は多くの国民から惜しまれつつ政権を譲り、拍手に包まれ、歓呼の声に送られて官邸を後にしたのであります。想えば「論功行賞」だの「仲間内」だのといわれながら政権が発足したのが夢のようです。「お坊ちゃま」と見くびっていた人たちが瞠目させたのは、そのしたたかな政権運営でした。

表看板の憲法や教育基本法改正のような、国論を二分しかねない問題では「世論の熟成を待つ」と性急な結論を避ける一方（老獪だと評する向きもありましたね）、教員の質と量の確保など教育環境を整え、ついに国際学力調査世界一を達成しました。

首相の給与3割カットに続いて国会経費も3割削減して範を示し、族議員や官僚、業界の抵抗を抑えて政府の歳入、歳出を思い切つて合理化し、財政再建をなしとげました。科学技術の振興と新産業の応援で経済の活力が高まったのが税収に跳ね返り、福祉支出の膨張をまかなえたのも記憶に新しいところです。

近隣諸国の政治事情をたくみに読み取って関係を改善し、それをテコに北朝鮮との問題を一挙に解決しました。米国に対しては、毅然として忠告する姿勢を示し、国際社会に「美しい日本」を印象づけました。

―てなことにならないものでしょうかねえ。
(塚田博康)